長崎時代の梅屋庄吉（その３）

―庄吉が駆け抜けた当時の長崎―

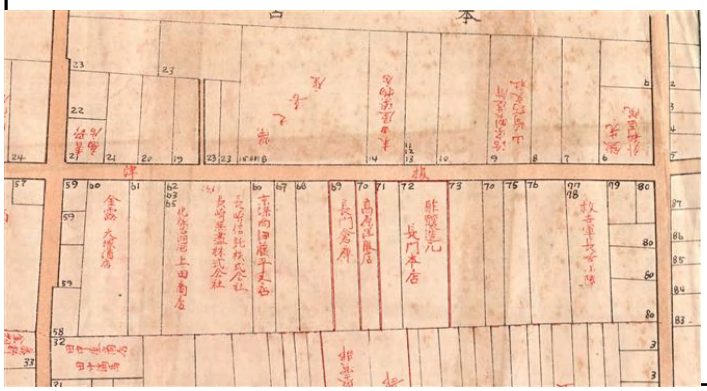
長崎史談会幹事　村崎春樹

庄吉と榎津小学校

車田譲治氏著「国父孫文と梅屋庄吉」によれば、明治8年(1875)1月10日に庄吉は梅屋商店近くの榎津小学校に入学するとある。当時の学校制度は明治5年(1872)9月5日に公布された太政官布告第214号によって小学校(下等科4年と上等科4年)が設けられ。明治12年(1879)9月29日公布の太政官布告第40号(教育令)で改正されるまで続いた。この学制は生徒の学力には関係なく年齢によって定められた学年に所属させる年齢主義で、小学校下等科は6歳から10歳までが修業年齢とされていた。これをもとに検証すると、庄吉は小学校下等科2年生として入学したと推定できる。

庄吉の小学校での記録は、明治11年(1878)榎津小学校の児童304名が同小学校に旗竿台とその築造費及び旗2流の寄付が行われた時の記録「学務課報告掛記録簿」長崎歴史文化博物館蔵に梅屋庄吉の名前が残されているので、明治11年3月に同校下等科を卒業したと思われる。庄吉は上等科には進学しなかった。また卒業は榎津小学校であるが、入学が明治8年1月とすれば、長崎県教育会編纂の「長崎県教育史」によれば同年2月までは、榎津小学校はなく、2月以降に東古川町にあった舊川(ふるかわ)小学校が榎津町六番地(現万屋町)に移り、榎津小学校に改称されたもので、庄吉は舊川小学校に入学したことになる。これらのことから、庄吉が学力が高かったため飛び級して卒業したことではなく、通常の卒業をしていることがわかる。さらに庄吉は、小学校入学まえの明治5年(1872)出来鍛冶屋町(現鍛治屋町)八番地の私塾佐藤塾に入塾して習字を習っている。ちなみに小学校上等科は4年制で10歳から14歳まで、これを卒業することにより中学校下等科(3年)または、外国語学校下等科(2年)、外国語学教師ニテ教授スル中学予科(1年)に進学資格を得ることになり、さらに上級の学校への道が開けることになる制度であった。

榎津小学校があった榎津町(大正６年)



長崎の新聞事情

長崎に於ける新聞は文久元年(1861)英字新聞「ナガサキ・シッピング・リスト・アンド・アドバタイザー」が最初であり、日本語新聞は慶応4年(1868)本木昌造が発行した「崎陽雑報」で明治2年(1869)までに13号まで発行が確認されている。明治6年(1873)本木昌造、西道仙、松田源五郎らと「長崎新聞」を発刊、明治9年(1876)「西海新聞」と改称した。明治10年には西道仙が独立「長崎自由新聞」を創刊、半年で廃刊。明治15年(1882)「西海新聞」は「鎮西日報」と改題した。明治23年(1889)「長崎新報」創刊。経済紙「長崎商報」も同年創刊。明治32年(1899)鈴木天眼と坂井伊之吉と共同で「九州日の出新聞」創刊。明治35年(1902)鈴木天眼が独立して「東洋日の出新聞」発刊した。また「長崎新聞」も創刊された。この当時の新聞は、「鎮西日報」「長崎新報」「九州日の出新聞」「九州日の出新聞」「長崎新聞」の5社であった。「九州日の出新聞」は大正6年3月に廃刊、「長崎新聞」は昭和10年に休刊となった、「東洋日の出新聞」は昭和9年に廃刊、「鎮西日報」は明治42年に廃刊、「長崎新報」は「長崎日日新聞」と改題、さらに「長崎新聞」となり現在まで存続している。明治22年(1889)長崎は、長崎市として市制を施行した、当時の長崎市民は55,000人で、福岡市は53,000人、熊本市52,800人で長崎は全国第14番目の都市であった。その時の新聞は「鎮西日報」「長崎新報」の2社体制であった。ちなみに日本最初の日本語新聞は「横浜毎日新聞」が明治3年(1870)に横浜にて発刊された。庄吉もこのような環境の長崎で生まれ多感な時期をを過ごし、彼の生き方にこの長崎の土地柄がなんらかの影響を与えた。(終)